編集後記

▼小林朗さんは、たとえばNRT（標準学力テスト）の数値が、校長をはじめ教職員を脅かしている姿を描き、学校に苦悩をもたらす元凶とその克服の方向を探ります。

▼梅原利夫さんは、カリキュラムの研究者として広く高い視野から特集の担う問題を明らかにして、動きだしている自主的な研究団体の具体的な実践の方向を展望してくれます。

▼座談会「少人数学級と習熟度別指導の問題」は、義務制の学校現場の喫緊の課題にいくらかは迫っている、と編集部は自負しています。

▼立石由美さんは、習熟度別指導の問題点をリアルに抉り出して、編集部がまとめた座談会を裏づけてくれます。向後秀子さんは、来年度から使用する教科書がすでに「発展学習」がメイン（主）に編集されていて、発展クラス、普通クラス、補充クラスという具合に、子どもたちがふるい分けられて、小学生の段階から「おれたちバカのクラス」と自覚すると警鐘を鳴らします。

▼小、中学校の先生方が、習熟度別の授業や「総合的な学習」の指導に悩まされながら真摯に工夫されている実践報告です。小東由男さんは、小学生にどのようにパソコンを指導して、その狙いは何かを自校のカリキュラムに即して、問題点を明らかにします。

▼加藤貞澄さんは、「総合的な学習の時間」の指導の自らの失敗も素直に述べて、まじめな追究です。高橋勇治さんは勤務校の「総合的な学習」カリキュラムを紹介しながら初めての経験をまとめています。

▼小林昭三さんは、理科教育の世界的な趨勢を踏まえて、学習指導要領の迷走ぶりを批判し、新ツール（道具）を使用して力学の概念を形成する教育実践などを紹介します。

▼小特集、東京都と新潟県の「日の丸・君が代」問題のトップで、平松辰雄さんは、今年の春の卒業式に自身が「歌わず・起立せず」で再雇用取り消しの処分を受け、それに対して訴訟でたたかう意義を解明しています。

▼同じく片山むぎほさんは、石原都政の教育行政を「戒厳令」下として、「卒業式・入学式等で歌わず・起立せず」の自由を認めさせる予防訴訟という創造的なたたかいを報告して、全国にアピールしています。

▼内山雄平さんは、新潟県の公立高校における「日の丸・君が代」のたたかいを概括し、指導要領や県議会のかかわりなども明らかにしつつ、式典のあり方にも問題を提起。

▼小島寿夫さんは、やはり生徒が主人公の卒業式をと新潟の歴史の浅い高校の体験を報告。

▼八木三男さんの論考では、日本の庶民の食事が歴史的にあとづけられたうえで、肉食のタブーの根拠やその克服、日本料理の伝統の技法・様式が明らかになり、何を発展さすべきかがわかります。「目からうろこ」です。

▼亀山裕さんの青春を駆け抜けた少年（後編）は少年院から戻った翔くんが、更生していくさまを予感させながら、交通事故が彼の命を奪うまでを描き、学校・教師の役割をあらためて認識させます。

（内山・吉田）

にいがたの教育情報 NO. 79

2004年9月10日発行

編集・発行　にいがた県民教育研究所

発行人　長崎　明

〒951-8116 新潟市東中通1－86 山崎ビル

電話・FAX(025)228－2924

振替口座・00640－0－12332

印刷所・中央印刷さぁびす

本誌内容の無断転載を禁じます。